

大正・昭和初期におけるろう教育の歴史的考察 —卒業生夫妻の証言にみる東京市立聾学校の教育の実際—

野呂 一・中川 辰雄

An Historical Consideration of Deaf Education in the Taisho and Early Showa Eras

Hajime NORO, Tatsuo NAKAGAWA

1. はじめに

大正12（1923）年8月27日、「盲学校及聾学校令」が公布され、かなり限定的ではあったが、義務教育の対象外に置かれていたろう教育について行政努力が求められることになった¹。当時、東京は大都会でありながら官立の東京聾学校しかなく収容能力にも限界があった。そこで、ろう教育のニーズが日増しに強くなっていくことを受けて東京市は重い腰を上げ、大正14（1925）年5月、小学校の教室を借りてろう教育を開始した。『日比谷小学校に特別学級 いよいよ5月1日から男女50余名を収容』の見出しで始まる新聞記事がある。

「既報の如く市ではろうあ児童の為に特殊教育を施す事となったが、いよいよ5月1日から麹町日比谷小学校内にろうあ学級2学級を設け男児31名女児25名を収容するはずである。現在市内のろうあ児童は300以上に達する見込みであるが東京ろうあ学校の外教育する所がなくしかもここでは14歳以上のものと制限されているので不便が多かった。市では藤井学務課長就任以来特殊教育の改善を図る事となり取あえず今年度からろうあ児の為学級を編成したが行々は独立したろうあ学校盲人学校をはじめ不具者の特殊学校をも始める事になっている。5月入学するろうあ児童中に7、8歳のものもあれば15、6歳のものもあるが年とったものには視話法では教えるので手まね足まねで教えねばならぬという。教師には小松伊四郎氏外1名が任命されるはずであるが来る23日午前9時から入学児の身体検査を行うことになっている」²

「手まね足まね」と表現するところに失笑してしまうが、ともかく東京市として本格的に取り組んだ最初の障害児教育がろう教育であった。「視話法」とは、明治初期に伊澤修二が米国留学の成果としてわが国に紹介した吃音者のための発音矯正法のこと、今は「口話法」と呼ばれている。「手まね」も今は「手話」に統一されている。

現在のろう教育はほとんどが聴覚口話法を基本として行われているが、私は戦前のろう教育は手話で行われていた史実があることからその内容を詳しく調べてみようと思い立ち、8年前から年輩ろう者へのインタビュー作業を開始した。終戦時まで手話による教育法を維持した聾学校として、函館、東京、浜松、大阪、佐世保などを回ったが、これらは手話で教育していた史実があることを

前提としてインタビューしたものである。こちらの意に反して意外な証言に私が驚愕したのは、本稿で取りあげるT雄さんT子さん夫妻をおいて他にいない。

T雄さんは、昭和2（1927）年4月、14歳の時に東京市に聾学校があることを知り、山梨から東京の本所に引っ越して日比谷小学校特別学級（通称：日比谷聾学校）に入学した。妻のT子さんは夫より1年早く、13歳の時に上野小学校特別学級（通称：上野聾学校）に入学している。先ほどの記事では、上野聾学校のことには触れていない。日比谷聾学校では「口話」で教育がなされ、上野聾学校では「手話」による教育が進められていた。前者は「口話組」、後者は「手話組」とも呼ばれていた。昭和3（1928）年4月、これらの聾学校は合併して東京市立聾学校としてスタートすることになり、彼らはともにこの聾学校の初等部の生徒になった。

大正9（1920）年、わが国で初めて口話法による教育が開始されてから昭和初期までの間、ろう教育は「口話か手話か」で大きく揺れていた。そして、川本宇之介らによる政治的活動によってろう教育が次第に口話法に集約されていく³中で、東京市立聾学校は当初から「純口話法を使命とする学校」として計画された。この聾学校で実践された先駆的な教育内容は全国的によく知られていた。ところが、先ほどT雄さんT子さんに行ったインタビューで、東京市立聾学校の中では手話が口話を凌駕していた事実があること、口話の教育法がまだ完成していなかったことがわかってきた。彼らが聾学校に学んだ大正14年から昭和7年の間は、口話と手話が混沌としていた時期とぴったり重なる。この学校では、生徒としての苦しみばかりでなく、教師としての苦しみもたくさんあったのである。昭和9（1934）年6月、東京市立聾学校創立10周年式典が行われ、それを祝して『拾年を語る』という記念誌が東京市立聾学校後援会から発刊された。この記念誌を読んでもみると、やはり、この時点で口話法は十分に確立されていなかったことが理解できる。

そこで本稿では、先に行ったT雄さんT子さん夫妻のインタビュー記録をもとに、『拾年を語る』の記事と照らし合わせながら、彼らが生徒として感じていたこと、また、教師が考えていたことなどを歴史的に検証し、当時の東京のろう教育事情を浮かび上がらせてみようと思う。

※本稿では、ろう者のインタビュー記録をゴジック体で再現している。また、本稿で当時の資料を引用するにあたり、旧漢字や旧仮名遣いなどは、内容を損なわない限り、現在の漢字や仮名遣いに、漢数字は算用数字に直したことをおことわりしておく。

2. 卒業生に対するインタビューについて

本稿で中心に取りあげる面接調査記録は、平成8（1996）年9月23日、神奈川県Z市在住のろう者夫婦、T雄さんとT子さんに面接調査（インタビュー⁴）したものである。彼らは私にとって、ろう教育に関係するフィールドワークで最初の情報提供者（インフォーマント）であった。取材当時、T雄さんとT子さんはともに84歳であった。

インタビューは、自由に語ってもらう方法で進めた。今回の記録内容が優れていたのは、T雄さんとT子さんの記憶力がしっかりしていたこと、つたない私たち記録者の真意を汲み取って、向こうが思うがままに自由に語ってくださったことに負うところが大きい。

それ以降、多くのフィールドワークを経験してわかったことだが、インフォーマントになっていた年輩のろう者たちはほとんどが初対面であり、手話サークルなどで自分自身のろう体験を語るがあっても、ろう教育に限定した質問に答えることに慣れてない人が圧倒的に多い。そのため、基本的に相手に自由に語ってもらう、こうしたインフォーマル・インタビューのスタイルをと

るのが効果的であった。

それからろう者の調査では、調査地域や対象者の年齢によって日本手話の語彙や文法が大きく変化して読み取りが困難になることが多い。これは手話教育が普遍化する前に口話教育が全国の聾学校を凌駕してしまったことに起因する。本来ならその地域に長く住んで、その地域で使われる手話や生活様式を体得してから調査する（これを参与観察という）のが王道であるが、調査時間が限られているときは難しい。そこで、その地域に住むろう者に詳しい人（ゲートキーパー⁵）を探し出し、対象者の選定や面接調査の交渉をお願いして、インタビューに挑む方法によった。インタビュー当日も、緊張をほぐしてもらったりお互いに通じなかった手話を翻訳してもらったりするためにゲートキーパーの同行をお願いしている。

手話によるインタビューでは、とっさに文章化してノートに記録することは相当の困難を伴うので、相手の承認を得てDVビデオ収録を基本としている。相手を緊張させないようにカメラを質問者の胸あたりに置くなど、三脚のセッティングには特に注意を払ってきた。

聞き取り調査においては、一回目のインタビューが終わった後、相手から「今度はきちんと話せる自信があるからまた来てほしい」と言われることがある。話すことで過去の情景や記憶が明確になってきたのだろう。このようなときには、二回目以降、次回からこちらの質問に一つ一つ答えてもらうというフォーマル・インタビューに切り替えて行った。

3. 大正・昭和初期における東京市のろう教育事情

1) 東京市立聾学校の設立と川本宇之介

ろう教育を進めるにあたり、東京市学務課は官立東京聾啞学校の教諭であった川本宇之介に調査を委嘱した。彼は、それまで行われてきた手話や筆談を主とした教育を排して口話によるのみ行う教育法に移行することを強く推進した第一人者である。川本の思想については後述するとして、彼が取り組んだ東京市立聾学校について彼の著述を引用する。

「次は純口話法を使命とする学校の設置である。就中大正14年5月日比谷小学校に新設された東京市の3特別学級は、勿論、純口話法によりて筆者の指導の下に結束して立ち、翌15年6月東京市立聾学校として校名より「聾」の字を除き一層その旗幟を鮮明ならしめたのであった。以後毎年新進の師範部卒業生を迎えて一路所信に邁進して、一大先達として活躍するに至ったのである。本校が後に前記「読話単文主義」の主張によって、本邦聾教育の方法の進歩発展に偉大なる貢献をする基礎がここにあったのである」⁶

東京市立聾学校ができるまで、わが国の聾学校の大半は盲学校を併設して盲聾学校と称していた。大正になって盲聾分離の機運が高まり、盲学校と聾啞学校とに分離していった。教育法はほとんどが手話と筆談によるものであったが、欧米の影響を受けて口話法が本格的に開始するのは大正9（1920）年のことである。その年、宣教師A. K. ライシャワー博士夫妻によって牛込矢来町の教会に日本聾話学校が開設され、アメリカ直伝の口話教育が開始された。時を同じくして名古屋市長官立盲聾学校長橋村徳一は、学校内に口話学級を開設した。また滋賀でも豪商西川吉之助が、アメリカから口話法の本を取り寄せて、愛娘はま子に手話を使わずに発音を教える指導を家庭内で始めた。その年の7月、川本は文部省普通学務局第四課に就任した。そして11月に名古屋市長

盲聾学校で開かれた第7回全国盲聾教育大会に出席、ろう教育があまりにも低調なことにショックを受け、口話法の普及に取り組むようになる。それから大正12年に公布された「盲学校及聾学校令」の草案作成にとりかかり、大正11（1922）年9月からは2年間、在外研究員として欧米視察に出かけている。（その間に盲学校及聾学校令は書き換えられてしまった）

大正13（1923）年4月、帰国した川本は文部省を辞して東京聾学校教諭に就任した。この学校はその前の月に退職した小西信八校長の方針により、筆談法を中心とする教育が実践されていた。川本は、手話が広く学校内に広まっていることを憂い、翌14（1925）年4月から新入生の学級を口話学級に切り替えて少しずつ手話や筆談による教育法を撲滅していったのである。

東京市学務課からろう教育の調査を委嘱されたことを機に、川本は「純口話法を使命とする学校の設置」に力を入れることになる。大正14（1925）年5月1日、東京市は日比谷小学校に特別学級を開設してろう教育を開始することを決定したが、当初20名の生徒募集に対して90名もの入学志望児が殺到したため、急きょ万年小学校（翌年に上野小学校と改称された）にも特別学級を設けてろう児を収容した。しかも、口話による指導が困難と判断された生徒をまとめて手話学級としてスタートさせていた。

川本の著書では、このような手話学級の存在にはほとんど触れられていないし、ろう者が使う手話をも罪悪視する著述が多い。川本にとっては「口話」がすべてであったから、どこの聾学校に手話学級があるとか、私立浜松聾学校のように手話教育を基本とする聾学校が存在していた⁷ことには目を背けてきたのである。

昭和3（1928）年4月、東京市立聾学校が設置されることになり、川本は口話教育によってろう児も話すことができるようになるとの信念から聾学校から「聾」の文字を抜いた。それ以降、全国的に「聾学校」という名が定着することになる。

2) 日比谷小学校特別学級と上野小学校特別学級

ア) T雄さん、日比谷小学校に入学する

T雄さんは山梨の農家に生まれ、生まれつき耳が聞こえないとのことであった。近所の子供達が教科書を手に小学校に通うのを見て、自分も勉強したいと思うようになったという。そんな彼に運が巡ってくるのは昭和2（1927）年、14歳のときであった。上京して暮らしていた兄夫婦の情報により、親が東京に聾学校があることを知ったのである。

8歳の時、近所の友達が小学校に入るのを見て私は寂しい思いをしてね、父に「私も学校に行きたい」と訴えたんだよ。父は困惑したんだけど、「もう少し待って。しばらくしたら畑仕事の収入が入るからそうなったら学校に入れてあげよう。」と言われてうれしく思ったんだ。

しばらくしてね、朝2時に起きておにぎりを作って汽車に乗って上京したんだ。生れて初めて汽車に乗ったんだからもう興奮してね、窓を開けて蒸気機関車の方をずっと見てたよ。

東京はネオンがにぎやかで、人もたくさんいてびっくりしたね。

渋谷で兄さん夫妻の家に行ったんだ。立派な食事を出してくれたんだけど、味が合わなかったね。田舎の食事の方がおいしいと思ったよ。

兄夫婦に連れられて都電に乗ったよ。大きな円形のハンドルを大きくグルグル回すやつ。

今は棒を右左に振るタイプだけど、昔は、大きく回していたね。信号じゃなくて人が旗を振って指示していたよ。

学校がなかなか見つからなくて大変だったけど、道行く人からバカにされっぱなしで、兄が怒鳴るとみんな一目散に逃げたね。やっとの思いで学校を見つけてね、そこにヒゲを生やした立派な先生が立っていて、そこで試験を受けたわけ。

当時、田舎から上京したときのカルチャーショックを克明に語ってくれた。私自身、小学部6年のときに函館から千葉の筑波大学附属聾学校に編入するため初めて上京したときのことを思い出し、思わず共感してしまった。

日比谷小学校の情景について、T雄さんは続ける。

皇居の前に日比谷公園があって、その向かいに日比谷小学校があって、そのとなりに裁判所があったんだ。ある時、学校に来て教室の中でみんなで口話の訓練をしているときに、ふと窓の方を見てね、「あーっ！」。

窓の向こうでね、両手をヒモで縛られて笠をかぶった罪人たちが並んで歩いていったんだよ。みんな驚いてね、窓の方を見ていたら、先生に棒で頭を叩かれてしまって、すぐ口話訓練に戻ったけどね。あの時は、みんなでへーって思ったんだよ。

その授業が終わってから、友達と「おい、罪人を見た？ 両手をヒモで縛られてね、笠をかぶって青い着物を着て並んで歩いてたね。」なんて話していたんだよ。

日比谷小学校は、明治34（1901）年6月、麹町区西日比谷町1丁目1番地の官有地に開校した。現在の最高検察庁（霞ヶ関1丁目）あたりである。西洋模造の元麹町区役所の建物を移転、補修して使用したハイカラな校舎であった⁸。この一部を借りて、東京市として初めてろう教育が開始されたのである。となりには日比谷高校の前身である東京府立第一中学校があった。同じく学校のとなりに裁判所もあったので、T雄さんのように生徒たちは毎日、裁判を受けるために連行される囚人たちを目撃していた。きっと政治犯か凶悪犯レベルのものだったのだろう。



日比谷聾学校が入っていた
日比谷小学校

イ) T子さんと上野小学校特別学級

T子さんが通っていた上野小学校についてたずねたところ、残念ながら場所は記憶していないとのことであった⁹。この上野小学校は大正15（1926）年4月に改称しているが、その前は萬年小学校と称していた。これは、明治36（1903）年に貧民学校としての先駆として開校したこ

とでよく知られている。

授業風景については、T子さんははっきり記憶していた。

私は（手話は）ほんの少しだったの。先輩が手話がうまくてね、私は見よう見まねで覚えたのよ。上が一期生で私は二期生だったの。一期生は手話がうまくてね、口話はわずかで手話が主だったのよ。私は、口話が多くて手話は少なかったの。だから見よう見まねで手話を覚えたわけ。うん。

そう。私たちは手話は自由だったの。上のクラスの方が手話がすごかったから、先輩の手話を見習って覚えたの。私たちは口話をしたり手話をしたりしたんだけど、上のクラスは手話ばかりでね、口話はほとんどなかったのよ。上のクラスの担任は相原先生だったの。相原先生は手話ばかり使ってね、通じ合っていたのよ。

T子さんの話を聞いてT雄さんは驚きの声を上げた。

「ええっ?! 相原先生が? それは驚いた。私の担任だったけど…」

T雄さんが驚くのは無理もない。彼が日比谷聾学校に入学して最初に担任になったのが相原久作先生であり、口話を中心に指導を受けていたので、彼が前に上野聾学校で手話教師として勤めていたことを初めて知り驚愕したのである。

ウ) 日比谷聾学校の授業模様

次に、T雄さんの回想を通して日比谷聾学校の授業模様に触れる。

私の担任の相原先生はね、頭がいい。口話しながら手話で解説してくれるからよかった。ところが、あっという間に異動してしまって、新しくきた先生は口話ばかりでね、私たちは「今の先生はイヤだね。前の方がよかったね。教え方がわかりやすくてよかったね」なんて話していたんだよ。

(相原先生は) 口話が少なくて、よく手話しながら教えてくれるからいいんだよ。たとえば手話で「乗る」とやってからその書き言葉を教えてくれるのに、新しい先生は口話で長々と話しかけるだけだから私には理解できない。みんなにとってもまずいんだよ、まずい。みんなわかんない。毎日口話の訓練ばかりしてね、「あなたはうまい」と太鼓判押されても、外では通じないわけ。変な話でしょ?

T雄さんの担任であった相原先生は、やはり手話が堪能で、口話の指導も生徒が納得するほど上手であったらしい。そのため上野聾学校で手話学級を担任していたことがいけなかったのであろうか、就任数年後に日比谷聾学校へ異動、口話指導を担うことになった。日比谷聾学校では、基本的に手話を禁止し口話を使うことを奨励することを方針としていた。それでも相原先生は口話を指導するとき手話を併用していたし、T雄さんをはじめ同級生の会話はもっぱら手話だったという。実際、手話の習得が困難な時代に手話を自由に使って教えることができる教師が全国的には何人もいたのである。

エ) 大池菅根校長の回想から

今までのT雄さん、T子さんの授業の回想に関連して、東京市立聾学校の初代校長に就任した大池菅根校長の回想を引用する。

「日比谷」に行つて中澤前校長から引継ぎを受けたのは、昭和3年1月30日であつた。当時聾学校は7学級で、3年2学級（担任伊東、阿部）、2年2学級（担任石黒、岡本）、1年3学級（担任相原、横田、橋本）であつたが、別に上野小学校内聾学級として2学級あつた。（担任3年大塚、2年小松）各学級担任は上記の通りであつたが外に専科としては「日比谷」の方で、水谷（音楽）、永井、小丸（図画、手工）、森岡（体操）の諸訓導に教授を願い「上野」では福澤（手工）、市川（裁縫）の両訓導を煩はしていた。

教室は、玄関脇の現在の衛生室を1年相原学級が使用し、他は全部2階で1教室を2つに仕切って使用していた。困つたのは職員室がなかつたことで、従つて終日職員同志顔を合はさぬことさえあつた。

上野小学校は教室には恵まれていた。（万年小学校時代はバラックであつたが）鉄筋コンクリートの大校舎で、完全に1教室ずつ与えられていた。併し教員には不幸であつた。一番手話に熟達している上に口話法の経験もある相原訓導が、学校の統制上日比谷の方へ来る必要が生じたため、手話には興味は有つていたが、元来は口話の研究をした大塚訓導がこれに代つたし、今1人の小松訓導も、手話は得意でなかつたので、主として文字を使用して指導していた。手話、口話、文字のコンバインド、システムでうまく行く筈はなかつた」¹⁰

日比谷聾学校の1年の担任の一人が相原先生だつたことから、T雄さんの記憶が確かなことがわかる。それより、「一番手話に熟達している上に口話法の経験もある相原訓導が、学校の統制上日比谷の方へ来る必要が生じた」ために、上野聾学校の教員は不幸で、教育法も滅茶苦茶だつたと述懐している。口話を推進する校長の立場で、教師と手話について客観的に評価していることは大変珍しい。学校の統制上とはいったい何のことであつただろうか。

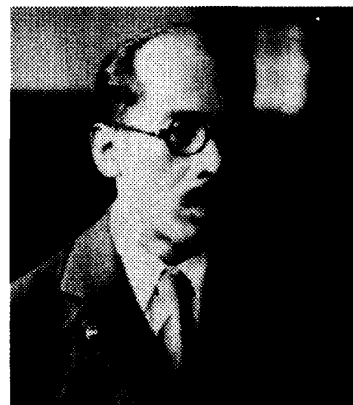
教室面では、口話組の日比谷聾学校より手話組の上野聾学校の方が恵まれていたようである。クラス数が少ないことも幸いしていたかも知れない。

オ) 大池菅根校長の校長就任と手話観

大池校長は、いわゆるろう教育の専門家ではなかつた。東京市立中学校に教諭として在籍していたときに東京市から東京市立聾学校の校長就任について交渉を受けた。

「聾学校長の交渉を受けた時、先ず第一に脳裡に浮んだことは、聾唾者は嫌いではないが今からあの手真似や、指文字を覚えることは大変である。

手真似、指文字に熟達して聾唾者に遺憾なく思想感情を伝え得るようになる迄には幾年を要するかわからない。これは御断りをする外はない。そう考えたので速座に辞退すると、山内視学は笑つて、否其心配は無用である。現在は「口話法」が採用されて、手真似の必



大池菅根校長

要はないのであると言われ、私は始めて口話法なるものの存在を知った訳である」¹¹

なるほど納得できる内容である。「手真似、指文字に熟達して聾啞者に遺憾なく思想感情を伝え得るようになる」ところに、当時は手真似は“ろう者の言語”である認識があったことを指摘しておく必要がある。まともな言語であれば、大人はその習得に多くの困難が伴うと考えるのが自然であろう。今は手話講習会や手話サークルなどが普及し、手話に関連する出版物も多く出されていることもあり、手話はコミュニケーション手段としてちょっとした努力で覚えられるという風潮があるのとはえらい違いである。

ところが交渉に当たった東京市学務課の山内視学は、「口話法」という武器を切り出し、手話を覚える必要はないと論ず。ろう教育の専門家のコメントでもないのに、自分が日常使っている言葉で教えるほど楽なことはないだろうと、大池校長は納得してしまった。ここに、聴者によるろう者のための教育法に口話法が容易に受け入れられ、異なる言語である手話を拒否してしまうプロセスが凝縮されているのである。

ところで大池校長は、なぜ手話の習得が困難なことを知っていたのであろうか。

「其の当時私の聾啞者に対する智識が極めて貧弱であったことは致方がない。私の遠い親戚に加藤達君という聾啞者がいた。京都の盲啞学校の日本画科を卒業し、大阪の「みのや」という扇店に勤めていたが、明治42、3年頃病死した。此の加藤君とは親しくしていたし、特に大阪在職中は、よく私の宅へ遊びに来たこともあるので、聾啞者の心理は多少解かっていたし、その無邪気で愛すべきことも知っていたが、同時に手真似の不便なことも、筆談の甚だ厄介なことも充分承知していた。

私は、一度加藤君の在学中に、京都の盲啞学校の授業を参観したことがある。(明治37年か) 国史の時間であったと思う。先生が左手に教科書を持ち右手を挙げ、目にも止まらぬ速さで5本の指をいろいろに屈伸すると、生徒はその意味を理解し、「よく解りました」というような表情をするのを見て、無条件に感服したことを記憶している」¹²

この盲啞学校は当時、京都市立盲啞院と称していて、わが国最初の聾学校として明治11(1878)年に創設された由緒あるものである。大池校長は、口話法があることを知る前に、京都で手話による教育が進められていることを自分の目で確認していたことがあり、手話を習得して手話で教えることの大変さが真っ先に思い出されて、校長就任の話に躊躇してしまったのであろう。しかし、聾学校に就職してからは、口話法の確立に情熱を燃やすことになる。

カ) T雄さんと口話教育

T雄さんの担当が相原先生から他の先生に代わって(その先生が誰かは明言しなかった)、彼は口話訓練に苦勞するようになった。

(新しい)先生の授業は、もう口話訓練ばかりだったね。私にとってなかなか難しくくてね、口を動かしてアイウエオしてもなかなかうまくいかなくてね、時間もずいぶんかかってしまったんだよ。ある時にね、私の発音を聞いて先生が「よろしい」と誉めてくれてね、試しに近くの食べ物屋で話しかけてみたらまったく通じなかったんだ。もう先生はいい加

減だなあと思ったね。

毎日口を動かしてばかりの発音訓練は、先生は私たちを子ども扱いしてね、イヤだったよ。そう口話ばかり！ 先生が文章を黒板に書き、私たちがノートに書き写すような勉強はないんだよ。口を動かすだけ、もう発声訓練ばかり！ 先生の話がわからないときにクラスメートに「今のは何だ？」と聞こうとするとね、メガネの先生に見つかって長い棒で頭を叩かれたりしたよ。痛かったなあ…、かなりね。「ほらほら、しーっ！」と内緒の仕事をやる時もね、向こうを向いていた先生にばれてね、「なんだ？」と睨まれたりしたんだ。

そう、口話で会話なんてできっこないんだよ。口話はまどろっこしいからね、みんな得手話で会話しようとするれば、先生が生徒の頭を叩いたりするんだよ。そんなことがしょっちゅうあったね。なかなかね…。

授業が終わったときは、さすがに「ふーっ」としたね。クラスメートと「おい、お前は口で話してわかるか？」「いや、手話ならすぐわかる。口話はやっぱり難しいね。」とよく話していたものだよ。

だって、聴者に声を出して話しかけたってね、向こうは耳に手を当てて「えーっ？何なに？」って聞いてくるもんだから、声出しても通じないわけさ。(口話は)ダメなんだよね。

生徒の間では、東京には日比谷聾学校、上野聾学校の他に官立の東京聾啞学校（当時は小石川区指ヶ谷町にあった）があり、そこでは手話が使われていることが、既に知られていた。T雄さんは言う。

他の聾学校では、手話を覚えることができたんだ。友達が言っていたんだ。手話が使えてね。妻もそう、いい例だよ。手話ができる。うん、できる。私のとは違って、妻の先生はね、口を動かしながら手話で教えることができたんだよ。私の先生はね、口話だけで手話は厳禁でね、手話は少しも使えなかった。妻はよかったね。

このように、日比谷聾学校の生徒たちは、自分の学校以外にいくつかの聾学校があり、手話による教育があることも知っていた。

3) 東京市立聾学校

ア) 日比谷聾学校と上野聾学校の合併、東京市立聾学校の創立へ

昭和2（1927）年6月22日、東京府から東京市立聾学校としての設立が認可された¹³。そして日比谷小学校長中澤留氏が校長を兼任したが、昭和3（1928）年1月25日からは初の専任校長として大池菅根が就任した。同年4月1日、日比谷小学校特別学級と上野小学校特別学級が合併して東京府北豊島郡巢鴨町字宮下1850番地東京市保健局所管仮校舎へ移転、東京市立聾学校としてスタートすることになった。現在の都立大塚病院があるところのあたりである。そして5月4日に移転披露式が行われた。T雄さんは続ける。

私は（日比谷）聾学校に入学したんだが、妻は別でね、上野の聾学校に入学してね、私のところとは離れていたんだよ。しばらくしてお互いの学校の教室が不足してきてね、東

京の大塚聾学校として、(日比谷聾学校と上野聾学校が) 合併してできたんだよ。

その最初の入学式(移転披露式のことと思われる: 筆者注)の時にね、私のところ(日比谷組)では先生が口をパクパク動かしながら話をしてわからなかったんだけど、妻(上野組)のは先生が手話通訳していたんだよ。私たちはすぐに「おおっ!」と思ってね、一斉に手話通訳している方を見てね、話の内容がよくわかるもんだから「そっちがいい、いい。」って思ったんだよ。そう上野だよ。上野は手話ができるんだよ。

東京市立聾学校は巢鴨にあったが、巢鴨では連想がよくないといって大塚聾学校と呼ばれていた。T雄さんもT子さんも「大塚聾学校」と呼んでいる。現在ある都立大塚ろう学校は、戦災で全焼したため昭和24年6月に新築移転したのであるが、住所は皮肉にも前と同じ巢鴨になっている(移転当時の住所: 豊島区巢鴨5-1030)。そのときに正式名称も「東京市立聾学校」から「都立大塚聾学校」に改称された。

東京市立聾学校の授業が始まるにあたり、生徒間の年齢差があまりにも大きかったので、年長組と幼少組とに別けて進めざるを得なかった。昭和6(1931)年3月に行われた初等部第一回卒業生の写真が何枚か残っており、それをみると大きい生徒の集合写真ともう一枚があどけない児童の集合写真が並んで載っていることから、当時の学校状況がうかがえる。こうしたことは全国的によく見られた。

イ) 東京市立聾学校の口話教育について

東京市立聾学校に赴任した大池校長の奮闘記に触れてみる。

「私の最初の仕事は、児童を早く覚えることと、教育の方法を知ることであった。児童を知ることは、すぐに出来たが、教育の方法を知るとは、甚だ容易でないことをこれまたすぐに発見した。何となれば、当時の聾教育は、その全般に亘って、単に「手真似をするな」という標語が掲げられてあったばかりで、口話法の具体の方法に関しては、名古屋市立盲聾学校に於ける多年の経験と、その経験に基づいた2、3の原則——然も甚だ多義的な原則(読唇先進主義、発語自然主義等)が、全国の聾教育を指導していたに過ぎず、その他の一切は全く暗中摸索の状態であって、我が石黒君すら、博く読んではいたが、未だ2ヶ年の研究では、漸く教授法の端緒を発見した程度で、明快な説明をなし得るところには達していなかった」¹⁴

非常に興味深い内容であることがわかる。

わが国のろう教育に口話法が本格的に開始されたのは、東京市立聾学校ができるわずか数年前、大正13(1924)年4月のことである。名古屋市立盲聾学校や日本聾話学校で実践されたにすぎず、地方の聾学校ではほとんど理解されていなかった。それも指導法の研究がままならず機を熟しての導入ではなかった。そのために手話か口話かでろう教育界は混乱していた。

東京市立聾学校の創設についても、上野聾学校と日比谷聾学校を合併して生徒全員を收容することは決まっていたが、教師の間では大きな問題があがっていた。

「愈々大塚へ移転することとなって、上野小学校内の聾学級を新校舎に收容するか、しないかということが問題であった。收容を非とする理由は、手話組があると、手真似が忽ち伝染するので、折角口話で養成して来た苦心が無駄になるからである」¹⁵

上野聾学校が手話で日比谷聾学校が口話で教育してきたのだが、ここで合併しては口話が手話に負けてしまうという危惧感が強かったのである。今からみれば信じられないことである。大池校長は続ける。

「当時の私は、まだ聾教育には経験が浅かったので、大した苦惱もなく、等しく聾学校の児童である以上、継児扱いをすべきでないと考えて、引取ることに決定した。そして、従来の手話組を出来るだけ口話化することに努力することとし、新3年の1組は、風間訓導に預けて、新に口話学級として出発することにした。

手話学級を併せた冒険は、予期された通り手真似の伝染となったが、併し次の理由で、その悪影響が比較的軽く済んだことは幸であった。

- (1) 手話学級と言っても、純粹の手話学級ではなく、口話をも取入れてあったこと。
- (2) 日比谷から来た口話組7に対し、上野から来たのは2組で、始めから口話組に圧倒されていた形であったこと。
- (3) 多少口話を知っていただけに、口話の出来ることを羨ましく思うと同時に、手真似を恥かしく思う様子もあった。
- (4) 其年の学芸会に、手話組が何もすることが出来なかったことが、非常な刺激となり、進取的な生徒は、口話に精進するようになった」¹⁶

実際にT雄さんとT子さんの証言によると、この記述はかなり誇張しているようである。大池校長の負け惜しみとも言うべきであろうか。

ウ) T子さんの東京市立聾学校の担任

あなた(夫)の担任は相原先生だったね。私(妻)のは風間先生だったよね。そう風間先生とってたの。女の先生。手話ができるし口話もしたよ。でも、口話が多くて手話は少しだったわね。

東京市立聾学校になって、T子さんの担任になったのは風間恵以であった。彼女は、東京女子体操音楽学校出身の教師であった。彼女の手記「手話を口話へ！」が残されているので、ここに一部を紹介する。

「校長として、大池先生を迎えた市立校が、日比谷小学校から分離して、ここ巣鴨の養育院跡へ引っ越したばかりの昭和3年4月——けれどももう7年も前のことです。大野先生、小川先生と御一緒に赴任して24人の生徒を受け持つこととなりました。校長先生はおやさしいし、当時既に有名であった石黒先生をはじめ、横田先生やその他みんな好い先生ばかりだしなどと、そんな事を臆げに感じつつ、それを喜んでいた程呑気なものでした。

而し、私は、上野時代に3年間、半口話、半手話で培われて来たこの24人をなんとかして微力乍ら自分の努力で純口話に改めてやりたいと念じ、全父兄を集めて方針を述べ、一ヶ年を殆ど準備工作の為め人知れぬ喘ぎをつづけて夢の如く過ごしました」¹⁷

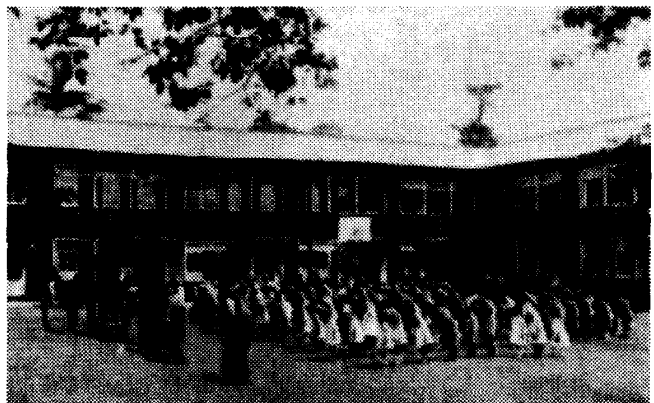
T子さんが「風間先生は手話が少しできた」と証言していることから、ろう教育と無縁であった彼女がいかにして手話を習得したのか興味をそそられる。しかし、先述の大池校長の文章にもあったように、大池校長は手話で学んだ生徒たちを口話だけで語れるよう矯正するために風間先生を配置した。彼女も口話による教育を当然のことと受け止め、努力したのであるが、その作業は困難を極めていた。

インタビューのとき、T子さんはかなり高齢であった割には、手話をしながら口話も積極的にしていた。口話訓練がT子さんをここまでしたかと思うと複雑な気持ちにならざるを得ない。

エ) 上野聾学校の手話生徒と日比谷聾学校の口話生徒の出会い

先ほど、T雄さんの語りの中で、移転披露式で上野聾学校生徒のために手話通訳がついたことを目にして、その存在に驚くとともに話の内容が理解できることの感動を覚えたと言っていた。その後も、朝礼では手話通訳が付いていたという。T雄さんが続ける。

朝礼の時、生徒はみんな並んでいたときにね、先生は口をパクパク動かしながら話をするんだけど、私たち（日比谷組）にはわからないんだ。けど、妻（上野組）のところでは先生が手話通訳していたんだよ。私たちはやはり「おおっ！」とね、いっせいに手話通訳している方を見るんだよ。



東京市立聾学校の朝礼風景

そう妻の先生は手話ができるんだ

よ。私たちのところは口話ばかりで手話はダメだったから、さっぱりわからなくて苦虫を噛んでいたんだ。だから、私たちは手話通訳の方を見るようになったんだよ。

話がよくわかるから、私たちも「手話はいいいね！」と話したんだけど、先生は「手話はダメだ！」と言って私たちの頭を叩いては「口話しなさい！」って怒鳴ったんだよ。それほど違っていたんだよ。妻は幸せだったね。うん。(笑)

純口話教育を誇りとしていた東京市立聾学校であったが、実際には口話ができない生徒が多かった。上野組が口話法をきちんと習得しないからだというのであるが、T雄さんの回顧からもわかるように日比谷組にも口話ができない生徒が少なからずいた。

朝礼の手話通訳は、上野組の生徒のために用意されたものと思われるが、これが日比谷組の生徒をも刺激し、手話に対する造詣を深めるきっかけになったことは確かである。

一方、教師側としては手話通訳をどのように受け止めていたか。神林かねの「赴任当時の感

想」を紹介する。

「……扱て亦一つは式日の際等、校長先生のお話の有る場合、手話学級の生徒の為に必ずや受持教師が公然と其れを手真似を以て訳してやって居た事であります。全く其度毎に一種言うべからざる暗さを感じさせられました。

而して何卒して読話のみにても出来得る様に努力してやらねばならぬと、其のみが来る日も考えやられる事で御座いました」¹⁸

このように、東京市立聾学校の教育方針としては、徹底した口話の習得を掲げており、手話ははしたないものとして蔑まなければならなかった。ろう者にとって習得が容易な手話を認めてしまうと、口話が習得できないという不安が教師にはあった。そうして教師たちは自分たちの共通言語である日本語（ことに話し言葉）で教育すること、それがろう児のためにもなると思うところがあった。

だが、すべての教師がそう思っていたわけではない。事実、相原先生は手話による教育法を捨ててはいなかったし、新しく赴任した教師の中には口話を疑問視する先生もいた。

体操科の芳賀国作もその一人で、東京市立聾学校に赴任して「最初感じた事二つ」について記している。

「一、普通児より大変体操が下手な事。

一、口話法が實際役に立つか何うかを疑いました」¹⁹

オ) 東京市立聾学校の研究会

純口話教育の実践を高らかに謳いあげて開校した東京市立聾学校であったが、先駆校としての悩みも尽きなかった。そこで、大池校長は学校全体をあげて研究会を開き、口話法の研究発表に力を入れることを提案した。このきっかけは以下の通りである。

「函館に於いて開催の日本聾啞教育会総会に私と相原、石黒の二君が出席した、此の会で、私は全国の多くの聾教育関係者と語る機会を得たが、不幸にして卓抜清新な意見を聞くことを得なかった。却って藤井君から聞かされた大阪市立聾啞学校の手話の論拠に啓発されるところが多かったのは皮肉であった。そして多くの人々の間に口話に対して一種の疑惧を懐いているような空気を感得して、どうしても理論と実績とを以って、口話の優越を示し、手話論者に止めをさすことの必要を痛感した。これが総会に於ける私の収穫であった。

石黒君に頼んで、五十音の研究を始め、毎週日を定めて協同研究を開いた。此の研究は、当時研究らしい研究として非常に有益であった」²⁰

「石黒君」とは、石黒晶のことであり、川本宇之介の思想を具現化する重要な片腕として活躍した教師である。石黒吟のペンネームで多くの著作を残している。

大池校長が刺激を受けた大阪市立聾啞学校は、高橋潔校長を筆頭としてろう児の共通言語と

して日本手話を擁護する聾学校の一つとして全国的に名を轟かせていた。教師たちの3分の1をろう者が占め、聴者教師も手話に造詣の深い人が多かった。大阪市立聾唖学校もまた口話法の台頭に危機感を持ち、手話による教育を理論的にも実践的にも固めていこうとした。手話を守りその理論化のために教員全員で校内研究会を開き、多くの研究成果を発表してきた²¹。

大池校長が恐れをなした「藤井君」とは、名を藤井東洋男といい、昭和5（1930）年10月から翌年12月まで自費でヨーロッパのろう教育を視察し、世界的なろう教育の流れを体で感じ取った数少ない教育者である。ろう者の演劇に可能性を見出し、学芸会とは一線を画した人生と向き合う立派な文化になりうるとして、大阪で「車座」という劇団を立ち上げ、手話による演劇を一般社会に発表していた。

しかし、教師自身による研究実践こそ、ろう教育の向上につながるという観点を見出した大池校長もさすがである。「理論と実績とを以って、口話の優越を示し、手話論者に止めをさすことの必要を痛感した」というが、これほどの覚悟がなければ、口話は手話に負けてしまうだろうという認識を大池校長は持っていた。彼は、石黒にハッパをかけることを始めとして、多くの教員たちに研究発表を勧めたのである。大池校長は回想する。

「昭和4年度は、当校にとっては、雌伏の時代であったと言ってよい。名古屋の学校を手近の目標とし、速にその域に達しようとして同僚一同鋭意研究に従事した。

此の年は大和の吉野で総会が開かれた。私の外石黒、小松、横田、大野の4人が出席した。石黒君は研究題「語調指導の適当なる方法」に就いて発表し、横田君は、私共が前年の暮から鋭意調査を続けて来た国語読本巻1から巻6迄の語彙に就いて、研究の一部を発表した」²²

東京市立聾学校では、中等部が増設された昭和6（1931）年4月から校務分掌の組織を改めて、研究部を新設し、組織を立て研究の題目を校長から指定することになった。また、そのときから「聾口話普及会」が「財団法人聾教育振興会」と改称され、本部が文部省内に置かれることになった。それに合わせて、今まで名古屋市立盲唖学校で編集されていた雑誌『聾口話教育』も東京で編集されることになったため、川本が編集を主宰し、石黒たちが編集員として働くことになった。そうして東京市立聾学校の研究成果が、雑誌を通して発表される機会が多くなってきたのである。

カ) 東京市立聾学校の学校生活

教師たちは口話法教育の確立に必死であったが、生徒たちはそんなことお構いなく自分の青春を謳歌していた。T雄さんはいう。

学校生活はね、ほんと友達といっぱいおしゃべりできて楽しくてね、たくさん遊んで仲よくしてたんだ。

口話での会話は無理だったけどね。もっぱら手話で会話して、仲よく遊んだよ。口話の授業は難しかったけど、教室から離れるとね、すごく楽しかったよ。

私はね、野球が好きで、テニスも好きだったよ。学校でやったんだ。私が学校にいたと

きは野球部として（本格的な）練習はまだなくてね、1、2年後、私が卒業したあとにうまいチームができたね。対抗試合はなくて、ほとんど学校内でやったんだよ。

T子さんも同様であった。

私はね、クラスメートとおしゃべりしたり、裁縫や編み物、ミシンとかね…、ドッジボールなどいろいろあったね。一番好きなのは裁縫だったの。着物をつくったりしてね。みんなの中では一番うまかったのよ。今はもうダメだけだね。

父権主義の社会からみれば、子どものあどけなさが封印されるのはいたしかたないのかもしれないが、口話は教室内だけのことと割り切っていたT雄さんのコメントを聞くと、慣れない口話のために他の科目の時間が大幅に削られてしまったり、手話を使うと頭を叩かれたりしたということに腹立たしさを覚えてしまう。

事実、私も小学部1年の時は毎日、朝から夜遅くまで口話の訓練に明け暮れて、家に帰っても日記を書かされたり母と向き合っただけで口話の復習を繰り返されたりして、子どもらしい遊びをしてこなかった。それでも学校に通うことが苦痛にならなかったのは、同じ仲間と助け合い、口話は口話と割り切って、一番大切なのは友達と遊ぶことだと信じてきたからである。まともな教科学習が始まったのは小学3年になってからである。だから聾学校は授業が1～3年遅れてしまい、学力もおぼつかないまま卒業してしまう生徒が今も数多くいる。

口話教育の先駆校であった名古屋市立盲啞学校や日本聾話学校では、体罰を伴いながら口話法を習ったという話をあまり聞かない。東京市立聾学校の口話教育方法が、現在のろう教育のスタイルを形作ったといえるのかもしれない。

キ) 口話法の行き詰まりと打開

東京市立聾学校の口話教育は設立当初から定まっていたわけではなかった。石黒は毎日、日本語学の文献から口話法を工夫していたし、教師たちも毎日が試行錯誤の連続だったのである。大池校長は、楽観的に口話教育の研究に比例して生徒の口話力が向上するものと思っていた。

「私は、始め読話力は、学年の進むに伴って自然に進歩し、6年にもなれば余程自由になるものと予想した。そして発語も、日々矯正されて、不断仕上げを怠らないなら、2年3年の後には、著しく進歩するものと楽しんでた。然るに、就任以来、生徒の読話発語の成績を眺めているのに、私の予想は見事にはずれ、何一つ満足すべきものを発見し得なかった。そしていろいろ考えた揚句聾教育の基礎は読話力の養成であり、読話力の養成には、先ず初学年に於いて十二分の練習をしなくてはならぬ。読話に全力をそそげば勢、発語に費す時間が少なくなる。併し発語を急ぐのでなければ心配することはない。父兄の発語偏重に引摺られない決心があれば1年間を読話に費しても悔いはないと考えた。勿論その時は、私に発語に関する見通しがついていた訳ではない。読話のための読話と、発語誘導を目的とする読話と2つの態度が入用だ等という智識があった訳でないが、何とか良い考が出て来そうに思われてならなかった」²³

東京市立聾学校は、川本が「発音」にこだわるあまり発音訓練からスタートしたが、開校時に初等部1年であった生徒は高学年になっても、実際には満足できる結果を得ることができなかった。そこで、発語の前に読話をしっかり指導しなければならないと考えるようになる。赤ちゃんの言葉の習得過程を考えると当然の流れであろう。

ちょうどその頃、石黒が「1年児にもつばら読話を指導してみよう、それによって発音訓練の時間を減らせるし、その効果もより出てくるだろう」と提案した。これが有名な「読話単文主義」の始まりである。東京市立聾学校は、昭和6年度から教育方針を大きく変え、大きく飛躍することになったのである。

さらに、聾教育振興会の委託によって、東京市立聾学校は「綴方指導の具体的方案」の研究を開始した。まだ文字を知らない1、2年の頃から絵日誌の指導を開始し、思想の啓発につとめるといふものである。これらの教育法の工夫は、現在のろう教育に相通じる事項として興味深い。

ク) 中等部の創設

昭和6(1931)年3月、日比谷聾学校や上野聾学校の開校に合わせて初等部に入学した生徒が初めて卒業することになるため、東京市立聾学校は中等部を新設する必要に迫られた。ここでも大池校長の奮闘がみられる。

東京市の財政がかなり窮迫していたため、中等部を5年とすると市会で成立困難になるとのことで、やむなく4年制とした。さらに年齢の高い生徒には、そのまま初等部を卒業させることにした。そして大池校長は、第3学期に6年生の父兄を相手に中等部の内容を説明し、入学を勧奨した。

「父兄の中2、3の人から、中等部に普通科の設置を熱望されたが、普通科も生徒3、4人では成立せず、且つ又無理に設けても、4年5年迄在学の見込がないので、これは断念して貰うこととした。その代り、午前中の学科を出来るだけ多くし、午後の木工、和裁縫を希望せぬものは、帰宅して希望の職業を学ぶことを許すこととした。

此の外此の機会に予科(幼稚部のこと：筆者注)3年を設け、初等部6年を初等部3年に引き下げよと言う人もあった。思いきった案として傾聴はしたが、これに従う訳にはいかなかった。

尚職業科としては、木工科と、和服裁縫科の2つに止めた。そして和服裁縫科は、和服裁縫に全力をそそぎ編物、刺繍等に多くの時間を割かぬこととした。

職業科を2種目に限った理由は、(1)現在の校舎は、それ以上余地がないため、(2)此等の2種目以外に、適当であると信ずるものが見当たらなかったため、(3)生徒又は父兄をしてそれぞれ最も適当と認めるものを真剣に求めしめるため(学校に設けてあるが故に、不適を考えず盲目的に入れようとする無自覚な人もある。)であった」²⁴

聾学校の経営責任者としてずいぶん苦勞したことがうかがえる。親から普通科の設置要望があったことは、当時としては画期的な意見であったが、財政や校舎の限界に阻まれてしまった。就職の可能性についても、木工や裁縫の他に可能性を見出せなかったことをあげている。指導

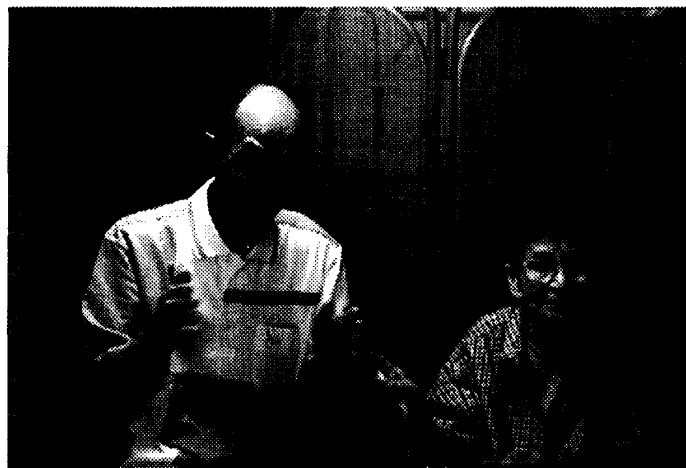
が容易であったこともあるが、男には木工を、女には裁縫をというように、ろう者は手に職をもつことが一番であるというのが当時の考え方でもあった。これが戦後の聾学校専攻科につながっていくのである。

そして昭和6（1931）年3月22日、第1回の卒業式が挙行された。大池校長の述懐によれば、「初等部卒業生51名中、30名が進んで入学した²⁵」とある。ところが、『拾年を語る』の「卒業生名簿」を確認すると、第1回卒業生はたしかに51名（男25名、女26名）いるが、その氏名の下にかっこ付きで記されている進路内容を確認したところ、昭和9（1934）年6月時点で中等部に在学している者は16名（男11名、女5名）しかない²⁶。つまり中等部に進学した30名のうち14名がなんらかの理由で退学している。中等部在学以外の卒業生では、コルク製造や靴製造の徒弟に入ったり、洋服裁縫や仕立屋、ワイシャツカラーなどの修業、見習いに従事していることが目につく。手仕事に関連する他の学校や塾に入学した者もいる。その一方で家事手伝いに従事する女性もかなり多かった。他に、木工や琴製造、左官というように、自宅の仕事を手伝う男性も3名いた。

昭和9年度までの卒業生は、初等部卒業後、正規に就職した者は皆無で、徒弟や見習い、修業人として社会に巣立つ者がほとんどであった。T雄さんのように高年齢で卒業していることもあるが、日本の社会経済状況の悪化などで就職先が狭まっていることや障害者に対する偏見が、ろう者の就職を大きく阻んでいたのであろう。

大正9年にわが国で最初に口話法教育を開始した名古屋市立盲啞学校でさえ、口話不能によるろう児の就職難を克服するための手段として口話教育を積極的に推し進める方針を採ったのである。

昭和7（1932）年3月、T子さんは第2回卒業生として初等部を卒業、和服裁縫所に通いながら修業することになった。その1年後の昭和8（1933）年3月、今度はT雄さんが初等部を卒業して、スリッパ製造の仕事に従事した。彼も本当は中等部に進学したかったのだが、卒業した時点ですでに成人していたため進学することができなかった。



インタビューに応じてくださったT雄さん、T子さん夫妻

4. 考察

1) ろう者の記憶力について

このインタビューを実施したとき、T雄さん、T子さんはともに84歳になっていた。聾学校に入学してから60年近く経っている。彼らに聾学校時代の思い出を語ってもらうことは無謀な冒険であったが、先述の記録内容から伺えるように、彼らの記憶力が相当高いことに驚いてしまった。60年前の出来事をはっきり記憶しているのである。T雄さんが日比谷小学校特別学級に入学した時の年齢が14歳であったことも考慮すべきであろうが、ここで一つのインタビュー記録を紹介したい。熊本盲唖学校に入学した当時のS子さんの思い出語りである。取材時は95歳になっていて、8歳の時の思い出を語ってもらったものである²⁷。

一番上の兄が、母と話し合っ、兄が姉に引出しから袴を出させたのよ。私は大変うれしかったのよ。学校に入学できると思ってね。袴はね、今でいえばランドセルと同じなのよ。

一番上の兄は手話がわからない人だった。2番目の兄はろう者だったけどね。

兄に連れられてね。左手に小学校があっ、私が「学校は左だよ」と言うと、兄は「うん」と首を振るばかり。しばらく進んで狭い道を通っていくと、オンボロ校舎があっ、ね、門もあっ、杖を持って歩く盲人とすれ違っ、不思議な気持ちになっ、のよ。

中に入って、小さな椅子に座って待っていたら、顔のいいひげを生やした好青年がやってきたの。そしたら兄が、自分のポケットから書けるものを探してなにやら書き始めたのよ。私は不思議でしょうがなかつ、のね。向こうのかっこいい先生がこのメモをみて、「うん、あなたはろう者だよ。私も同じろう者です」といわれてえらく驚いてしまっ、のよ。

ろうの先生がいることを初めて知っ、のね。「ここは熊本だよ」と手話で表してくれてね。もう珍しかったけど、私はうれしかったのね。

二階には細長い校舎になっ、てね、女子クラス、混合クラスとかに分かれてね、生徒も少なかつ、のよ。小学2年の頃に入学してね。手まねばかりで大変うれしかったのよ。翌朝は朝早く起きて、学校へ急いだのよ。

ろう教育の経験についてろう者に語ってもらうとき、ほとんどと言っていいほど、入学時のカルチャーショックを鮮明に語る人が多い。このS子さんもやはり入学時の模様をはっきり記憶していた。聴者両親のもとに生まれ育っ、たろう者にとって、聾学校に入学することは、自分以外に耳のきこえない仲間が多くいることを初めて知る強烈なきっかけとなっ、て脳裡に残るのだから。

事実、私も昭和42(1967)年4月、4歳の時に函館聾学校幼稚部に入学したが、そのときの出来事はやはり鮮明に記憶に残っている。ぼろい二階建ての木造校舎で、自分と同じろう者がいることを知っ、た驚きや、手話で語り合うという便利な方法があることを目にしたときの感動などである。しかも、翌年6月に妹が生まれたとき、ちょうど運動会で母が応援席にいなくて大泣きしたことも覚えている。

ろう者という、手話を第一言語とする(たとえ大きくなってから手話を習得したとしてもその習得時期が中学部以前であれば手話が自ずと第一言語になっていくことは経験的にわかってい

る) 人たちは、目で言葉を追うことで特別に記憶力が発達してくるのかもしれない。また、手話には書き言葉がないことも記憶力に大きく貢献するのだろう。

2) 川本宇之介の口話に対する思想について

東京市立聾学校の創設をはじめ、口話法の普及に情熱を燃やした川本宇之介であったが、彼はなぜ自分の全生涯をろう教育に費やしてきたのか。今まで長いこと彼の功罪やその背景などについて、さまざまな研究や議論が続いてきた。国民教育の対象から外されていたろう教育を、戦後になってようやく普通教育の地位まで持ち上げた川本の努力に着目し、彼の業績を肯定的に評価するものがほとんどであったが、最近になって現在のろう教育の矛盾をつき、それを形作った川本を批判的に研究する動きも出てきている²⁸。川本は、それだけわが国のろう教育の舵取りに多大なる影響を与えた人物であり、彼なくしてわが国のろう教育史を語ることは不可能といつてよいだろう。

川本は大正14(1935)年4月、文部省を辞して東京聾唖学校の教諭に就任するが、ろう教育の現場を経験してこなかったし、実際、東京聾唖学校でろう児を相手に教鞭を執ったのを見たという教師は誰一人いなかったという。川本は、教育家としてではなく思想家として国民国家の立場で口話法を推し進めた。川本が残した著作はどれも口話法の普及を念頭に置いて誇張的に書かれたものである。そのうちの一つ、昭和15(1940)年に著された『聾教育学精説』は、歴史編と理論編から成り立ち、なんと658ページもある大作である。戦後もろう教育のバイブルとして、多くの聾学校教師たちに広く読まれてきた。

最後の「総括」の中で、「国民的思考と感動の教養」の見出しのもとに注目すべき文章がある。筆者は、ここに川本の思想が集約されているとみる。そこで、ここに全文を引用して考察してみる。

「国民学校国民科国語の目的中、吾人(川本のこと；筆者注)聾教育者の最も注目すべき点であり、かつ大いなる刺激を与えられる点は、国語の第三目的である。即ち国民科国語は、
日常ノ国語ヲ習得セシメ、共ノ理解力ト発表力トヲ養ヒ国民的思考・感動ヲ通ジテ国民精神ヲ涵養スルコト

なる要旨中の第三「国民的思考、感動ヲ通ジテ国民精神ヲ涵養スルコト」これである²⁹

この本が発刊されたのは昭和15(1940)年12月、すでに第二次世界大戦が始まって1年以上が過ぎている。日本も、昭和13(1938)年3月17日、国民を戦争に駆り立てるための基本として「国民総動員法」が成立し、戦時体制が一層強まってきた。そして、昭和16(1941)年4月から小学校は「皇国民の錬成」を目的とする国民学校に衣替えることが決定された。川本は、国家主義の観点からそうした社会の変化を肯定的に受け止めており、これから開始される国民学校の目的に触れ、口話教育の正当化を深めていくのである。

当時は国民国家の言語として、「国語」こそが「国民精神」の宿るところであり、そのような性質を持つ「国語」を話すことがすなわち「国民」になることだという観念が「国語」を普及させる側に強くなっていった³⁰のである。(アンダーラインは筆者)

川本がいう「日常ノ国語」とは、音声言語としての日本語を指している。音声言語をきちんと

習得することで理解力や発表力を高め、「国民的思考、感動ヲ通ジテ国民精神ヲ涵養スルコト」を至高の目的とすることを明言している。川本は、「国民精神の涵養」という表現をよく使っており、ある意味でろう者の国民化にこだわっていた。

「吾人が再三再四力説したことは、聾児に口話を教えようとするのは、決して外国語を教えるのではない。日本人である聾児に日本語を授けるのである。本来の日本語は言うまでもなく音声語即ち口話である。この口話を教えることによって聾児に日本人たるの国民的思考を練磨し、感動を興起させ以て国民精神を涵養し、有為有能なる国民の枢軸たる教養を完成せしめようとするのである」³¹

「聾児に口話を教えようとするのは、決して外国語を教えるのではない」とするところに、川本は、手話がろう者の自然言語になっていることを意識していたことがわかる。手話をそのままに日本語を教えるということは、ろう者にしてみれば外国語（第二言語）として音声言語を身につけるといことにつながる。つまり、ろう者が2つの言語を有する状況になってしまうということ、川本はすでに見抜いていた。そこで、手話は劣る言語としてこれを排して第一言語として音声言語を教える必要があるとしたのである。

明治33（1900）年の小学校令に始まった国語教育は、方言を撲滅して正しい発音による「標準語」の普及を目標としていた。あまねく通じる、すなわち普通の言語（これが「話し言葉」である）を習得することが求められていた。これは、川本が「本来の日本語は言うまでもなく音声語即ち口話である」と主張することと一致する。

川本は、ろう児は耳が聞こえないから日本語を話すことができないのではなく、今まで聾学校がきちんと発音指導をしてこなかったからろう児が手話を習得することになり、国民国家から除外されてしまう運命に陥ってしまったのだと考えた。しかも川本は、それまでの海外研究でろう児に対する発音指導が可能なことを確信していたことも、自信につながっていったのであろう。ろう者も見た目は日本人と変わらない。ろう児に手話ではなく音声言語だけを授けることによって、自分たちと同じ日本人として「国民精神を涵養し、有為有能なる国民の枢軸たる教養を完成」することができると考えた。川本は続ける。

「言語を単なる思想伝達の道具と見る考え方は、極めて通俗な言語観である」と国民学校教則要項の放送中に述べてあるが、聾学校に於いてもまた、同様なる見地に立たねばならぬ。手話でも思想が通ずる等考えるのは、この通俗的考え方の一種であり、又聾啞者には文字言語によって日本精神を涵養することが出来ると言うならば、それもまた音声言語の本質と、その文字言語との関係とを知らない浅薄なる考である」³²

国民学校の教則要項からの我田引水という気がしないでもないが、ともかく川本は、言語とは崇高な思想の伝達手段であり、日本人として正しく国民精神を育むためには音声言語だけを習得するように努めなければならない。この考え方は聾学校でも同様であると強調している。そして川本は、音声言語以外のもの、すなわち文字言語や手話は単なる道具とみなし、これらによって国民精神を涵養することができるという考え方は絶対許されないと切り捨てたのである。あらゆる言語に優劣はないとする言語学の考えからすれば、川本の議論はまったくの愚論といえる

かもしれない。それでも川本の考え方は、口話教育を推進する教師たちに盲目的に受け入れられてきたのである。

「吾人はつとにせめて式日唱歌だけでも、生徒に教えて、之を歌わせたいと念願して居ったが、漸く数年前より之を行うに至った時、保護者の中には、子供が愈々一人前の日本人になれるとって、感泣して喜んだ者があつた。之即ち国民精神が音声言語と唱歌とを通して、涵養されることの最も顕著な例である。音声言語なくして唱歌は之を教授し得ないではないか」³³

川本は、ここでも「国民精神が音声言語と唱歌とを通して、涵養される」として、聾学校の式日唱歌を例にあげ、ろう児も日本人として声を出すことは当然のことであり、ろう児をもつ親にとってもこのうえない喜びであるとしている。親にとって、自分の子が通常児と同じように会話ができることを望むことは当然の願いであるかもしれないが、単に口話教育の正当化に利用されているとしか思えない。

しかし、ろう児が声を出して話すことができようになったとしても、その発声能力にはばらつきがあるし、耳が聞こえない以上は相手の話をきちんと理解できる保障がどこにもない。このことはT雄さんの体験にも表れている。大池校長を始めとする石黒ら教師たちも、こうした問題には早くから気付いていた。そこで東京市立聾学校は、「読話単文主義」への転換によって乗り切ったのである。

教壇に立ったことのない川本は、結局ろう者の聞く能力についてほとんど言及してこなかった。そのことが戦後のろう教育にひずみを生ずるきっかけにもなっていく。これについては別の機会に考察していきたい。

5. おわりに

大正15（1926）年6月、純口話法を使命として設立された東京市立聾学校はまもなく創立80周年を迎える。笑顔でインタビューに応じてくれたT雄さんT子さん夫妻は、わが国のろう教育が手話か口話かで大きく揺れていた中を精一杯生きてきた貴重な証人であった。彼らの表情や語り口の奥に当時のろう教育に対する思いを理解する作業は思いのほか難儀を極めた。

ろう教育の主人公はやはりろう児である。今までのろう教育史研究は、慈善的要素が強く教育側の視点でしか捉えてこなかった。しかも手話を取りあげられ口話を強要されて教わったことのない聴者による文献研究がほとんどである。ろう教育や手話に関する研究は、「教えた」経験と「教わった」経験とが一体化することになって初めて成立する学問のはずである。そこで本稿では、実際に聾学校に学んだ年輩ろう者のインタビュー作業を通して大正・昭和初期のろう教育の歴史的考察を試みたのであるが、多くの課題を残してしまい、自分の力がまだ不十分なことを痛感させられた。

ろう者にとって、聾学校の存在は特別なものといってよいだろう。手話を弾圧されてでも同じ仲間と机を並べることの楽しさは、実際に経験した人にしかわからない。私もそうであるが、卒業後20年を過ぎても同期会旅行に半数近くが参加するほど、クラス仲間の連帯は今も続いている。地域に生きるろう者も、同じ仲間とともにろう協会を結成し、行事があるときは手話で夜遅くまで語り合うこともしばしばである。ここに手話を守っていく健気な姿をみる思いがする。今は、マイノリ

ティの考え方が認められつつあり、バイリンガル教育も当たり前の学問になり、手話の普及も予想を超えて大きく広がりつつある。今まで長年使われてきた障害児教育という言葉も特別支援教育にとって代われ、その制度内容を一新する動きも出てきている。そうした社会の変化を受けて、口話教育を主軸としたろう教育は大きな転換点を迎えている。

ろう児の発達支援とは、同じ仲間とともに同じ場所で自然な言語環境で育まれるように配慮して初めて成り立つものとする。そろそろ国民国家の形成の下でろう者の国民化をめざして広められた口話法の呪縛から解き放し、ろう児主体の教育にしていかなければならない時期に来ているだろう。ろう教育史研究の究極の目的はここにある。

(謝辞)

最後に本稿を書くにあたって、フィールドワーク理論について丁寧にご指導いただいた矢野泉先生、植民地文化論を通して戦前の日本の読み方をご指導いただいた白取道博先生、川本宇之介の分析考察について議論に応じていただいた東京学芸大学大学院生の藤川華子さん、ろう教育の歴史全般についてご指導いただいた元筑波大学教授の上野益雄先生、市立名寄短期大学の清野茂先生、東京大学大学院生の澁谷智子さんに、この紙面をお借りして厚くお礼を申し上げます。

註.

- ¹ 盲学校は盲人に聾学校は聾啞者に普通教育を施すこと、都道府県は盲学校聾啞学校を設置することなどが規定されたが、これが実現しがたい場合は、附則によって設置を延期してもよいとしていた。
- ² 『東京朝日新聞』、大正14年4月22日(火)、6面
- ³ 昭和8(1923)年1月27日、文部省で開かれた全国盲聾学校校長会議における鳩山一郎文部大臣の「口話を奨励する」との訓辞によって、日本のろう教育が大きく口話法に傾いていった。
- ⁴ フィールドワークの方法には、参与観察やインタビューなどがある。フィールドワークの手法については、佐藤郁哉『フィールドワークの技法』新曜社、2002を参考にした。
- ⁵ 外部からやってきた調査者の人柄や調査目的を値踏みし調査や取材の可否について判断し決定する権限と責任をもつ門番のような役割を担う人をゲートキーパーと呼んでいる。(佐藤郁哉『フィールドワークの技法』新曜社、36頁、2002)
- ⁶ 川本宇之介『聾教育学精説』信楽会、228頁、1940
- ⁷ 野呂一「手話による国語教育法の実際」『言語』第32巻第8号、大修館書店、58～61頁、2003において詳しく扱っている。
- ⁸ 『千代田区教育百年史』上巻、453頁、1980
- ⁹ 『台東区教育史資料』第4巻、東京都台東区教育委員会、292頁、1980によれば、上野小学校(萬年小学校)は下谷区萬年町2丁目54番地にあった。現在、台東区北上野2丁目の駒形中学校の北側に面しているあたりである。
- ¹⁰ 大池菅根『拾年を語る』東京市立聾学校後援会、3頁、1934
- ¹¹ 前掲、4頁
- ¹² 前掲、3頁
- ¹³ 東京市立聾学校の設立にあたって、「本校ハ聾啞学校ニ関スル規程ニ基キ聾啞者ニ普通教育ヲ施シ其ノ生活ニ須要ナル特殊ノ知識技能ヲ授ケ特ニ国民道徳ヲ涵養スルヲ以テ目的トス」とあるが、これは川本の思想をそのまま反映しているものと理解してよいだろう。(前掲『台東区教育史資料』、293頁)

- 14 前掲、5頁
- 15 前掲、8頁
- 16 前掲、8～9頁
- 17 前掲、75頁
- 18 前掲、75頁
- 19 前掲、86頁
- 20 前掲、9～10頁、昭和3（1928）年7月の出来事である。
- 21 上野益雄、野呂一、清野茂「大阪市立聾唖学校教師たちの手話の考え方」『つくば国際短期大学研究紀要』第8号、2002において詳しく取り扱っている。
- 22 前掲『拾年を語る』、11頁
- 23 前掲、15頁
- 24 前掲、12～13頁
- 25 前掲、14頁
- 26 前掲、191頁
第1回卒業生の進路明細は以下の通りである。
中等部在学16名、他校へ進学3名、修業・徒弟8名（仕立屋・洋裁・彫刻師・コルク製造、靴製造、ワイシャツカラー製造）、家業従事5名（裁縫、木工、琴製造、左官）、家事手伝い13名、死亡1名、その他不明5名。
- 27 野呂一、ビデオ『手話で学んだ先輩たち』、2001に収録されている。
- 28 藤川華子・高橋智「大正期における川本宇之介の公民教育論の検討」日本特殊教育学会第42回発表資料、2004年9月26日などにおいて、川本が一貫して主張した公民教育論の観点から川本の業績を分析している。
- 29 前掲、『聾教育学精説』、655頁
- 30 安田敏朗『帝国日本の言語編制』世織書房、38頁、1997
- 31 前掲、『聾教育学精説』、655頁
- 32 前掲、655頁
- 33 前掲、655頁

※東京市立聾学校関係の写真はすべて『拾年を語る』に掲載されているものを引用した。